

矢部 彰著 『森鷗外 教育の視座』

山崎 一 穎

文学作品を読み解くという行為に関しては、国語教育者も研究者も同じである。優れた国語教師は優れた研究者であり、優れた研究者また、優れた国語教師でなければならぬだろう。そのことを矢部彰氏の『森鷗外 教育の視座』は、如実に示している。

本書は次の様な構成になっている。

I 作品論

舞姫

妄想

山椒大夫

高瀬舟

寒山拾得

II 教材論

現代国語教材『舞姫』考

教材『最後の一句』考

III 実践記録

『舞姫』授業ノート

一覽して明らかなる如く、ここで論じられている作品群は、いず

れも中学校・高等学校の「国語」教材として扱われている鷗外作品である。矢部氏は教材研究を徹底的に深化させる過程で、先学の論文に目を配り、研究史を辿りつつ自己の見解を提示する。それ故に、本書が『森鷗外 教育の視座』と題された所以である。

『舞姫』論の構築にあたって、従来の「回想的筆記形式」を問題にしつつ、対読者意識を解明する。「相沢謙吉」の署名を持つ『舞姫に就きて気取半之丞に与ふる書』（しがらみ草紙）第七号、明治23・4・25）を押え、豊太郎が相沢を「憎むこゝろ」という「私」の情念を超えて、「日本近代の心ある」人を読者の第一に位置付けたことを指摘する。豊太郎の「日本近代国家建設を希求する念は深く、太田豊太郎を駆りたててやまない啓蒙精神は尽きない」故に、相沢に読まれるだけでは満足できず、「国民之友の紙上に公」にせずにはいられない所まで対読者意識は肥大化していると見る。しかし、「国民之友」の不特定多数の読者ではないことを言明する。矢部氏は次の様に述べている。

太田豊太郎の識関におぼろな相貌を隠顕させることのある「この行ありしをあやしみ、又た誹る人」、あるいは、『舞姫』冒頭で仮想される「心ある人」こそ「太田豊太郎が舟中にて作りし記」の日本近代の現時点における「読者」であったにちがいない。

私は矢部氏が『舞姫』に対する対読者意識を問題とすることで、鷗外の「書く」意識を究めようとする態度を評価する。矢部氏の論が説得力を持つか否かを検証しなければならない。それは矢部氏が引用している『舞姫に就きて気取半之丞に与ふる書』の後半

部分の相沢謙吉の言説をどう読み説くかにある。すなわち、「近ごろ聞けば、鵬外漁史といふものありて、此記（山崎注）太田豊太郎が舟中にて作りし記」に題するに舞姫の二字を以てし、これを国民之友の紙上に公にしたりといふ。嗚呼、是れ既に事を好めることの甚しきものにあらずや」（傍点山崎）

矢部氏のいう豊太郎が「私」を超えて相沢と一体であることに関して、ある条件を付けた上で認めるにしても、右の引用文は相沢と鵬外漁史とは、対峙している関係にある。豊太郎が相沢を「敵」と認識していないだけ、豊太郎の自我は曖昧である。官僚相沢にとって、豊太郎の「恨」など一時のものとしか考えていない。豊太郎を祖国に連れ帰ることこそ、豊太郎にとっても己れにとってもよいと思っている。豊太郎から「手記」を読むことを要請されても痛痒を感じない。読み捨てておけばよい。豊太郎の反噬もそこまででしかない。豊太郎の「手記」を読んだ鵬外漁史は豊太郎の「恨」の内実を重く受け止め、「国民之友」に公にすることで豊太郎の反噬を「この行ありしをあやしみ、又た誹る人」に向けて、また「心ある人」に対して吐露したのである。それ故に、鵬外漁史の行為は、相沢にとって「事を好めることの甚しきもの」と映ったのである。

そこに『舞姫』を発表する鵬外の決意と危険があったことを読み取ることができるのではないか。

私は矢部氏の論理の方向を認めつつ、このように論理展開に若干の修正を加えることで対読者意識の全貌が把握できるのではなからうかと考える。

矢部氏は、豊太郎の「恨」は、「まさに〈近代市民精神〉を立脚点とする〈正しき心〉の不在、あるいは喪失の認識」であり、「豊太郎の日本に持ち帰る〈近代〉が〈正しき心〉の根を失い、空洞化したものでしかない」限り、『舞姫』は「ヨーロッパ近代文化の本質受容の不可能性という普遍的真実を、鵬外の想定する〈心ある人〉に訴える機能を担う文学である」と結論付けている。この見解については異論はない。

次に『妄想』を論じて次の結論を導き出す。

『妄想』ほど、日本近代における純正医学確立の「夢」の「挫折」から文学創造の「夢」の「勝利への行動の過程」をのぞかせる鵬外の文学は、ほかにない。『妄想』は、まさしく鵬外の二つの「夢」に架橋された文学と言わなければならない。けれど、妥当な見解である。

『山椒大夫』について新しい読みを提示する。矢部氏はまず作品の読みの方向を次の様に定める。

『山椒大夫』は「死と再生」の劇を内包する「貴種流離譚」である。だが、今まで、安寿の「献身」を核とした「漂泊」の苦難と奇蹟の発現を重視するあまり、厨子王（正道）の「貴種流離譚」の劇に内包される成年式をめぐる「死と再生」のモチーフ、社会秩序の「再生」をめざす正道の「政」である「奴婢」の「開放」と山椒大夫一族の繁栄の意味究明を怠っていたのではないか。

と、問題提示をし、「安寿の〈献身〉の契機をもかかえこんでいる厨子王（正道）の〈貴種流離譚〉としての視座から解説される」

べきであると主張する。そして次の様に読み解く。

「政治」原理に則った無限に持続される「復讐」と「殺戮」から解放されないかぎり近代を本質的に「再生」させることは不可能であるとする認識が、鷗外を『山椒大夫』形象化に駆り立てたとするのが私の理解である。

本論考は論理が明確で、説得力を持つ。

『高瀬舟』を論じて、矢部氏は次の様な見解を示す。

『高瀬舟』に先行する『最後の一句』のうちの「献身」も、父親救命を第一義とする「献身」ではなかった。(中略) うちの「献身」は、父親の救命という願望実現をめざすだけではなく、血族的共同体社会としての「桂屋」の、かつて「希望の光」を掲げて生きてきた「奮闘的生活」(『平日』)の総体の奪還、「桂屋」という血族的共同体社会の構成員たる人間集団の正常な機能回復をめざした果敢な行為であった。『最後の一句』の主題は、『高瀬舟』の喜助と弟の精神の一体化した状況と通底する。『高瀬舟』の隲ろな薄明の世界の背後に深々と横たわっている闇の底には、たんに弟の喜助に対する「献身」にはとどまらない、血族的共同体社会を構築することで苛酷な現実と対峙して生きてきた二人の人間の、血族的共同体社会存続への強烈な意志が貫流しているのである。

矢部氏が『最後の一句』を血族的共同体回復へ向けてのいちの行為と読んでいるのは(詳細は本書のⅡ・教材『最後の一句』考)、徳川幕府の法律条文から分析した私の見解(『跡見学園女子大学国文学科報』(第18号、平成2年3月18日)掲載の拙論『最後の

一句』論攷)とは論を異にしているが、矢部氏の作品分析はその自律性に於いて、説得力を持つ見解である。

矢部氏は『高瀬舟』に於ける喜助と弟との関係を「弟の死を促す喜助の行為を責める擬制の〈罪〉は、弟の〈献身〉の情念を喜助の精神内部に孕ませ弟の〈生〉の意味を自らの精神内奥に定位することを果たした喜助の〈目〉をくもらせることはできなかった」と捉えていることに異存はない。しかし、「弟の魂の終焉は、喜助の精神内部に構築する血族的共同体社会の全円的成就」という言説が私にはわからない。何故に「血族的共同体社会」なのか。少くとも矢部氏が『最後の一句』で論じた血族的共同体社会とは、その言説に差異があるのではないか。むしろ、氏自身の『山椒大夫』の分析からすれば、「死と再生」の線で捉える方が自然ではあるまいか。

『寒山拾得』に於いて、寒山・拾得の「哄笑」が「閻丘胤の〈名〉と〈真の生〉の認識の転倒に向けられていたこと、『妄想』で提出された舞台の〈役〉と〈真の生〉とをめぐる懷疑が、『寒山拾得』世界最後の〈時〉において〈別次元への飛躍〉を遂げた」という見解を示す。そして、

寒山・拾得の「哄笑」とともに鷗外の前に開かれることのある新しい文学創造の世界は、あらゆる屬性を削ぎ落とし、歴史の片隅に鎮まったままに置かれていた「名」の実質を模索し、その「名」と「実」との緊密な結晶体を再生する営みであった。

と、史伝『澁江抽斎』へ拓かれていく世界を見据えている。『寒山拾得』から史伝への分析は、論理的で説得力がある。ただし、

『寒山拾得』の世界の分析に於いて、執筆直前の貴族院議員推薦に關する石黒忠憲宛書簡、長谷川泉氏の指摘する退官直後執筆した『空車』を手許に置き、発表を延ばしている理由等を導入して分析するとうなるのか。

総じて矢部氏の論考は、真摯に作品と對話を重ね、先学の論に

耳を傾けつつ、独自の読みを提示する努力を怠たらない。論理も説得力を持ち、見解も納得できる。鷗外研究に本書を得たことを喜ぶたい。

(一九九一・一 近代文藝社 四六判 三四二頁 二五〇〇円)

新刊紹介

大屋幸世著

『書物周游』

本好きな著者が自ら蒐集してきた明治期以降の書物をめぐり、これまで書いてきた文章がまとめられている。文芸雑誌や単行本にとどまらず、出版社のPR誌や文庫本にまで視野は広く及び、それぞれの書物の経てきた紆余曲折が興味深く辿られている。なかから幾つかを挙げれば、『不如帰』の数多い「二番煎じ本」には、文学史の隠れた側面が窺え、また最早手にすることの困難な雑誌の袋については、写真が掲載されている。「幻の雑誌」とされる山本周五郎ゆかりの「椿」も、同様に書影入りで紹介されている。さらに、佐藤春夫の単行本

『陣中の豎琴』を「文藝」初出と比較し、「負傷兵のなか」に「自己を寓」する鷗外の「無言の書」として『うた日記』を見る春夫の、「文藝」編集者の自己検閲、本文削除に対する怒りが共感こめて読みとられているが、そこには鷗外研究者としての著者のまなざしが光る。その他にも、今日非常に珍しく貴重な資料の紹介を多く含み、様々な書物との出会いにおける興奮と喜びとを伝える一冊である。

(一九九一・四 朝日書林 A5変型 二〇五頁 二八〇〇円) [井上 優]

『竹田出雲 浄瑠璃集』

並木宗輔

岩波書店刊「新日本古典文学大系」93巻。近松歿後の時代浄瑠璃から、初代竹田出雲作「芦屋道満大内鑑」、並木宗輔作「狭夜衣鴛鴦剣翅」、文耕堂・二代目出雲他合作「新

うすゆき物語」、二代目出雲・三好松洛・並木宗輔作「義経千本桜」の四作を翻刻し、脚注を施す。いずれも人形浄瑠璃が歌舞伎を圧倒して人氣を誇った十八世紀中葉の黄金時代の作品で、浄瑠璃史上種々の問題点を含む名作である。解説では諸説を踏まえつつ、新たな位置づけがなされている。

また単なる文学作品ではなく、語り物・演劇として総合的に鑑賞するための配慮が、限られたスペースの中に尽くされている。一般向けの注釈書では初めて、原本に近い形で文字譜の翻刻を実現。現行演出の調査の上に絵画資料等を援用して、初演当時の舞台機構や人形操りの実態の再現に努め、他に類をみない成果となった。節付・演出とも簡明な解説を付して理解を助けている。

(一九九一・三 岩波書店 A5判 六一二頁 四〇〇〇円) [和田 修]